

	2018年度			
	小論文B			
	(問題)			

<H30129281>

注意事項

1. 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
2. 問題は2と3ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
3. 解答はすべて解答用紙の所定欄に、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
4. 受験番号および氏名は、試験が開始されてから、解答用紙の所定欄に正確に丁寧に記入すること（左記記入例参照）。所定欄以外に受験番号・氏名を書いてはならない。なお、解答用紙が複数枚ある場合には、それぞれ所定欄に記入すること。
5. 受験番号の記入にあたっては、左記（数字見本）にしたがい、読みやすいように、正確に丁寧に記入すること。読みづらい数字は採点処理に支障をきたすことがあるので、注意すること。

(記入例)
53001

万	千	百	十	一
5	3	0	0	1

(数字見本)

0	1	2	3	4
5	6	7	8	9

6. 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
7. 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き、解答用紙を裏返しにすること。
8. いかなる場合でも解答用紙は必ず提出すること。
9. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

小論文作成上の注意

1. 句読点、記号等、および改行のために生じる余白もすべて字数に含む。また、解答用紙の字数を超えて解答してはいけない。（句読点、記号等は、必ず独立した二マスを使用する。）
2. 本文中に自分の氏名を書かないこと。
3. 下書きは、別に配付の下書き用紙を使用すること。試験終了後、下書き用紙は持ち帰ること。

左の文章を読んで、設問に答えなさい。

いきなり「日本人は存在するか？」と質問されたら、この国のたいがいの方はポカんとするだろうと思います。「いや、だってオレ、日本人だから」と笑う人もいれば、「日本人の私に向かつて、なにを失礼な！」と怒り出す人もいるかもしれません。たしかに、たとえば「日本国籍を持っている人」を日本人の定義とするなら、これは愚問になります。でも、現在の国籍制度が始まる前から、日本列島には人が住んでいましたよね。しかし、彼らの時代には「日本国籍」がなかったから、彼らは日本人ではないとは普通言わない。そう考えると、なにを持って「日本人」とするのは、国籍の有無だけでは決められません。

だとすると、「日本人」とはなんなのか。海外に居住している日本国籍の人もいます。日本に住んでいる外国籍の人もいます。帰国子女、日本に帰化した人、国際結婚で生まれた子供、海外に移住した日系移民、その子孫……。仮に、「国籍が日本である」「日本語を話して暮らす」「出自が『日本民族』である」「いま日本に住んでいる」の4つの指標で考えた場合、すべてに当てはまらない人はさすがに除くとしても、2の4乗から1を引いて実に15通りの「日本人」のパターンがありうることになります。そのうちどこまでが日本人で、どこからがそうではないと、一律に定義できる基準はあるのでしょうか。

どうでしょう。そう簡単には答えが出なそうですよ。どうやら「日本人は存在するか？」という問いへの答えは、それほど自明のものではないようです。私たちはふだん、「いまは、国籍制度の話をしているから」「南米の日系人コミュニティの話だから」といったかたちで、その場その場の会話の文脈ごとに「日本国籍保有者が日本人」「『日本民族』の血を引いているから日本人」などの定義を、使い分けて会話をしている。しかしそういった個別の文脈を超えて、客観的に実在する存在として「日本人」を捉えようとすると、その正体はとたんにあいまいになり、するりと私たちの手から逃れてしまうようです。

当たり前に存在すると思っていたものが、深く考えると本当は存在しないのかもしれない。実は、自然現象も含めて、この世界にはそんなことがたくさんあります。

地球上からいっさいの生物が絶滅したとするね。

——いきなり、何さ。

そのとき、それでも夕焼けはなお赤いだろうか。

これは、哲学者の野矢茂樹氏が書いた入門書『哲学の謎』の冒頭にある一節です。「そんなの、赤いに決まってる」と思った人もいるでしょう。でも、よく考えてください。夕焼けは、太陽自体に「赤い」という性質があるから、赤いのでしょうか。

たとえば、健康診断でときどき検査があるように、色覚として赤と緑を区別できない障^{しょうがい}碍^{がい}がありますよね。もし「いつさいの生物が絶滅」する寸前、ただひとり残った人類最後の1名がそうであった場合に、はたして夕焼けは「赤い」と言えるのでしょうか。また、生物のほとんどは人間とは色覚が違う（色覚どころか視覚のない生物もいる）でしょう。人間が絶滅し、ゾウリムシやコウモリだけが残っていた場合、彼らは夕焼けをどう感受するのでしょうか。「それでも夕焼けはなお赤いだろうか」、これが、野矢氏の問いかけです。こういう命題を考える哲学の分野を、認識論と言います。そこでは「夕焼けが赤いから人間には赤く見える」という考え方を、素直には信じません。「赤い夕焼け」という現実がまず存在して、それをあるがままに人間が認識するのではなく、人間がそれを認識するから「赤い夕焼け」という現象が現れると考える。「現実↓認識」という一方の単純な流れではなく、人間の認識が現実^{じつじ}に働きかけることで「赤い夕焼け」なるものがはじめて出現し、それがふたたび人間の認識にフィードバックされる……というループが生じていると考えるのです。

だとすると、「日本人」についても同じことが言えることになります。認識論的に考えれば、あらかじめ実体として存在する日本人を私たちが認識しているのではなく、私たちが「日本人」と認識したものが、日本人として出現する。会話の文脈ごとに、私たちは「これこれの特性を備えた存在を日本人と見なそう」と定義し、その話題が持続するあいだだけ、その定義を満たす人々が「日本人」だと呼ばれている、と言うことになるわけです。見方を変えると、この事実は、「私たちは「先に存在している現実を、後から認識して判断している」のではなく、時としてステレオタイプや偏見も含めた「認識の方がむしろ先にあつて、それに合わせて現実を作り上げて生きている」ことを示唆^{しき}しています。

（與那覇潤『日本人はなぜ存在するか』集英社インターナショナル）

※Web公開にあたり、著作権者の要請により出典追記しております。
<http://www.shueisha-intl.co.jp/archives/3006>

〔設問〕

(一) 筆者は「客観的に実在する存在としての『日本人』」について、どう考えているか。百六十字以上二百字以内で要約しなさい。

(二) 傍線部1の筆者の考えを、自分の体験に即した例を用いて、四百字以上、五百字以内で具体的に説明しなさい。

〔以下余白〕

